

15.9%, 後者61.5, 7.7%である。したがって, B型肝炎ウイルスの関与は本邦例とインドネシア例はほぼ同様の傾向を示すものと考えられる。2) 肝硬変症のAFP追跡値の変動および上昇度は, 抗原陽性群に最も著明である。肝癌の発生はAFP漸増を示した3例(乙型2, 甲'型1例)の抗原陽性者に認められた, なお発生前後に抗原価の下降するものがみられた。すなわち, HBs抗原陽性群は陰性群に比較し, 肝癌発生のhigh risk群と推測される。また3例とも発生前, 既にHBs抗原を保有し, 肝癌例の高い抗原保有率は, 発生後の二次感染に由来するものではないことが示唆された。3) 小肝癌における存在診断率は, 選択的肝動脈造影法超音波断層法ではほぼ全例に描出可能であり, 腹腔鏡, 肝シンチグラムでは約半数例に診断可能であった。

以上より, 本邦および東南アジア地域における肝癌は, B型肝炎ウイルスが重要な病因と考えられる。また, 肝硬変例のprospectiveな追跡調査により, HBs抗原陽性例はhigh riskとみなされ, 肝癌早期発見への適切な経過観察および存在診断が根治手術につながる道であることを強調したい。

c. 肝癌の早期診断

(消化器内科) 大井 至

肝癌の診断は, 数多い消化器の悪性腫瘍の中でも, 最も難しいものの一つと言えるだろう。

1969年来, 私達は十二指腸ファイバースコープを開発し, 直接膵・胆管の開口部である十二指腸乳頭を見, 更にそこに細いカテーテルを挿入して, 膵管や胆管を造影する。内視鏡的膵・胆管造影(EPCG)を行なってきた。

今日までの施行総数は約1,500例にも達している。

このように, 簡単に, 膵管造影が行なえるようになって, 肝癌の診断が一段と飛躍することが期待された。消化器病センターで手術または剖検にて確認された肝癌(乳頭部癌は含まない)87例に対し, EPCGは50例に施行された。膵管が造影されたのは膵頭部癌で15例54%, 膵体尾部癌で17例77%であった。肝癌ではEPCG施行時に, すでに十二指腸に浸潤しているほど大きくなっているものも多く, 特に膵頭部癌では, そのため膵管造影率は低くなっている。

膵管像が得られた場合には, 膵本管の閉塞, 狭窄などの膵腫瘍を思わせる所見が, 膵頭部癌で93%, 膵体尾部癌で82%に得られ, その診断率は非常に高い。直接膵液の細胞診で悪性細胞が確認された症例も少なくない。E

PCGで疑診または診断できなかった肝癌の大部分は, 鉤部に発生したものであった。

肝癌の手術適応を決めるには, 血管造影は不可欠で, 当センターでは大部分の症例に総肝動脈あるいは胃十二指腸動脈へカテーテルを挿入して, スーパーセレクトィブに血管造影を行なっている。

このように肝癌は, 現在, かなり診断が可能になつてきているが, 切除可能な肝癌の診断ということになると, 肝癌では症状の発現が遅く, 検査が行なわれた時には, すでに手術もできないというのが実情である。肝癌の早期診断に対する戦はこれからであろう。

(追加) 原発性肝癌・肝癌のRI検査法の立場から

(放射線科) 日下部きよ子

肝シンチグラフィは, 肝の大きさ, 位置, 形状の他, 肝内局在性病変の有無とその位置を容易に知らせてくれるので, そのスクリーニングテストとしての価値は大きい。しかし局在性病変が欠損として示されるので, 小病変は周囲の正常組織からの放射能に影響されて検知しにくい。その解像力は2~3cm ϕ とされているが, 深部の病変はそれ以上でも検知し得ないことがある。そこで α -fetoproteinのラジオイムノアッセイなどの他のRI検査との併用が考慮される。一方では原発性肝癌に積極的に集積する放射性医薬品の開発が試みられており, ^{75}Se -selenomethionineや, ^{67}Ga -citrateが実際に用いられている。前者はヘパトーマに対する特異性が注目されているが, 特に α -fetoprotein非産生の場合にはその価値が大きい。この他 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -methionineが開発され, その臨床的価値が検討されている。

また将来はRIを標識した抗 α -fetoprotein抗体のシンチグラフィへの応用も期待される。

RIを用いた膵の形態診断は, ^{75}Se -selenomethionineを用いてなされるが, この場合も病変を欠損として示すので, 小病変の診断は困難である。

従来80~85%程度の診断率を得ている。

一方, ^{75}Se の物理的半減期は127日と長く, これは悪性腫瘍を前提とした場合にのみ用いられるべきものであり, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -methionineなどの短寿命核種の利用が期待されている。

4. 血清学的がん診断法の展望

(国立がんセンター病院細菌免疫室)

向島 達

癌の血清学的診断は古くより提唱され, 行なわれてきたが, その多くはその診断に関与する物質を同定できな